

# 古賀志瀧神社祭礼 「年頭に弓を引く神事」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

古賀志山中にある瀧神社の祭りは、毎年一月の第二日曜日に行われる。氏子は十戸、祭り参列者も一戸一人であるから十人という少人数であるが、祭祀組織をはじめ、神事終了後の弓を引く行事、祭礼後当番宿で行われる当番引継ぎ式は、民俗学的にも価値が高い。

瀧神社は古賀志山麓の唐沢組と中島組の自家筋の家十戸が祭祀する神社である。これから自家筋の家は、古賀志町の草分けの家である。こうした特定の家だけで祭祀する組織を「宮座」といい、古い祭祀形態



高盛り飯をいただく

こうした弓引きの行事は、的への矢の当たり具合で、その年の吉凶等を占うものである。神社の祭りは、本来、神様を招いて願い事を聞いていただくものである。しかし、神様は黙して語らず、何かの形で表す。その一つが占いであり、その代表的なものとして弓引きがある。したがって矢の的への当たり具合は、神様の御意思として素直に受け入れなければ

ならない。しかし瀧神社の弓引きでは、「鬼」に代表される悪魔払いを占うものである。だから矢が的を外れたからといって素直には受け入れられない。そこで、矢が的に当たらない場合には、石を投げて的を打ち壊し悪魔払いが出来たことにする。瀧神社の弓引きは、年頭の大事な行事なのである。弓引き後は、本当番宅で当番引継ぎが行われる。神社や祭礼に関する書類等を本当番から下番に渡す儀式であり、この時に酒宴が催される。飯椀に注いだ甘酒を本当番と下番との間で酌み交わし、さらに他の氏子が同じく飯椀に注いだ甘酒を回し飲みをする。本当番は五杯、下番は七杯を飲み干さなければ当番引継ぎには移れず、両者が甘酒を飲み干したところで、書類の受け渡しが行われる。この間他の氏子たちは、回って来た飯椀の甘酒を飲み続けるのである。



での場での  
弓引きの  
神事

当番引継ぎ式が完了すると、今度は本膳に盛られたご馳走をいただく。内容は飯椀に山盛りにした白米飯、汁椀に大根の味噌汁、坪椀に人参・牛蒡の煮物、平椀に干瓢・大根・里芋・コンニャクの煮しめ、平椀の蓋には焼いた塩引き鮭が添えられるのが定番である。甘酒だけでも腹一杯の上にごうしたご馳走を平らげなければならぬ。まさに「強飯式」である。

祭り当番の引継ぎ式には、瀧神社のように強飯の風習を伴う所が多い。我々は「おもてなし」の風習を大事にするが、その基本は食べきれない程の御馳走を出すことにある。日頃粗食に甘んじなければならぬかた裏返しなのであろう。強飯の風習は、おもてなしの風習が強調されたものでもある。

なお、瀧神社祭礼では現在、当番引継ぎのみが行われる。祭りの衰退が古賀志にも押し寄せている。